昭和36年1月16日第3種郵便物認可　昭和42年5月1日第125号（毎月1回1日発行1部20円）

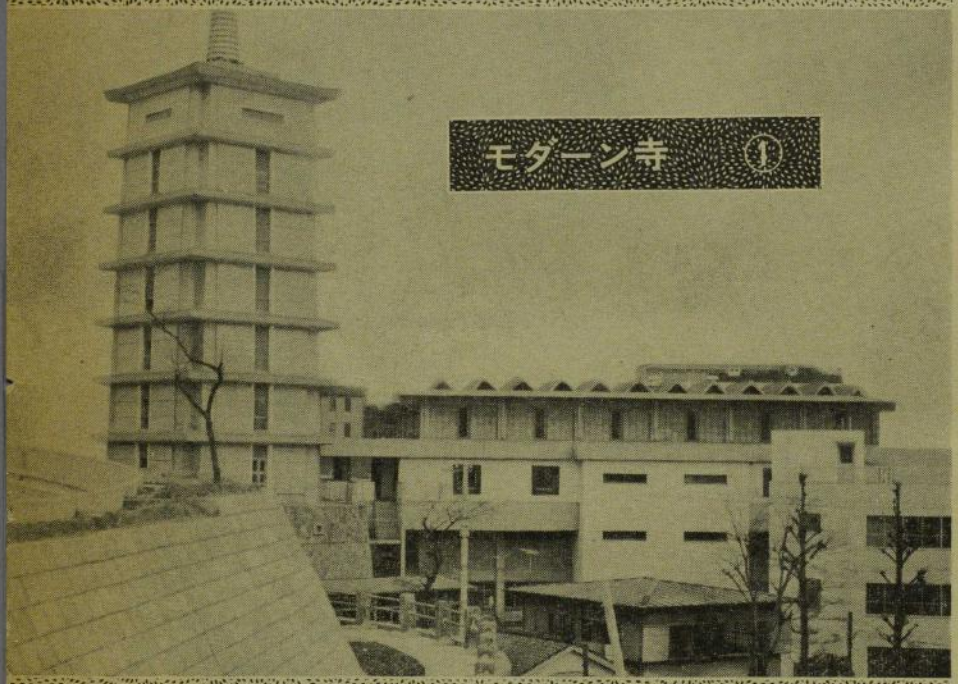
No. 125

全仏

5/42.

東京・中央線信濃町駅前の浄土宗一行院千日寺

（右が本堂・塔は納骨堂）



特集 〝里から寺へ〟

―連載対談―お寺さんの理想像

語り手　東大教授　笠原一男博士

財団法人　全日本仏教会

全仏
第3種郵便物認可
昭和42年5月1日

連載　在家対談

里から寺へ（二）

お寺さんの理想像

語り手

東京大学教授
文学博士　**笠原一男**

聞き手前白

長州・萩に近く、お西さんの信心に厚い土地に育ち、そこばくの慣習的な信仰はあるにしても、仏教の素養はなんにもない在家の私しでございます。

その私しが、その道の大家に、無鉄砲な愚問を発するのは、コッケイな風景ではございます。でありますが、その愚問のもたらすものに、案外、お寺さん方の参考になることが出てくるのではないか―。

このようなわけで、ご高著の「日本人の宗教」の前段で述べられていることを中心に、対談ではなくご講義を拝聴する形で、いろいろご教示をお願いいたします。

聞き手　西本梧作
（全日本仏教会組織専門委員）

―仏教の既成教団の現状評価から伺いましょう。既成教団というよりも、仏教そのものが衰え、退勢にあるといわれております。笠原先生のご著書を拝見しますと「現代の既成仏教は、本質的な意味からいって、死んでいるという評価に、軍配があげたくなる。」こう述べておられるわけですが、これは全く死んでおるのでございましょうか。

それとも老衰の極、臨終状態ではあるけれど、まだ息だけはしているという意味でございましょうか。

笠原　これはですね。死んでいるんだったら、もう私がなんと云ったって、これはどうにもならないのですが、問題は死にかかっているということなんです。

死にかかっているということは、手当のしかたによっては、また生き返る可能性があるということです。ここに私が第三者として、既成仏教に対して、生き返ってくれという注文を出す意味があるわけです。

―そのような危篤状態になった原因でございますが、それはいろいろ複雑な因果関係によるものと思いますが、端的に云って、なにが一番主もな原因でございましょうか。

笠原　なぜ死にかかっているか、そんな評価ができるかという問題ですが、これは結局、既成の仏政が現代社会において何をしているかということ、これをまず考える必要があると思います。

と同時に、既成仏教というものが生れたときにはいったい何をしたか、そしてまた、現代から考えて既成仏教―さらに仏教は現代の社会および将来の社会で何をするのが正しいか、何をすべきかということです。

これはやっぱり、それぞれの仏教の、開祖の態度と関連させながら考えてみますと、現代の既成仏教の坊さんたちが、この現代社会で果たしている役割りが、いかに本質的な役割りと遠くかけへだたっているかが判るわけです。

そういう点でまず私たちは、この現代社会のなかで坊さんたちがやっている仕事―これをあげてみたいと思います。私はいろいろあると思います。それを大きく分けますと、私はいつも三つあげるんですけれど……。

その第一が古寺巡礼ブームです。奈良や京都のお寺を巡拝する、これが終戦後十年くらいから現在まで、ブーム状況が続いているわけです。いまなどはシーズンのいかんを問わず、奈良、京都の有名寺院は、まさに門前市をなすという状況です。しかもそういう観光寺院の坊さんの生活というものは、まさにウケに入るという形で、これはもうサラリーマンの十数倍はおろか、はるかに派手な生活ができるわけです。

じゃあこれをみて、笠原おまえは既成仏教が死んでると言うか、あるいは死にそうだと言うか、こういう反問がくると思うんです。私はもちろん、これをみても既成仏教は、正しい姿で生きているとは決して言えないと思うのです。

観光と葬式の仏教

―そこで先生は、本質的な意味では死んでいる、あるいは眠っているというほうの評価に、軍配があげたくなる、ただし、観光仏教と葬式仏教で大きな役割りを、現在の仏教および僧侶はしている、と言われておるのでございますね。

笠原　ええ、観光仏教、それから葬式仏教、もうひとつは宗祖の哲学がございます。たとえば親鸞でも、法然でも、あるいは一遍、道元、栄西、日蓮、それぞれりっぱな哲学を、自分なりに、釈尊の教えのなかから解釈し直して、鎌倉時代の民衆に救いを説いたわけです。

しかし、この宗祖がそれぞれの時代で果たした役割りというのは、決して、仏教の哲学を学問としてもてあそんだり、哲学として楽しんだり、文化としていじくり回す―そんな態度は全面的に否定しているわけです。

親鸞も言っていますが、仏教は決して学問ではないんだ、信仰なんだと……。阿弥陀仏に「阿弥陀仏、助けたまえ」という信心を起こして念仏を唱える、これだけでよろしいんだ、このことに疑問をもつ連中は、いかほどでもいかほどでも仏教の学問をして、仏教が学問でなしに、信仰であることを知りなさい……

と。こういう意味でなら、鎌倉仏教の開祖たちは学問は否定しておりません、肯定しています。問題は、仏教を学問する態度が、それ以前と全然違うわけです。

――奈良仏教、平安仏教のそれとの比較で――でございますね。

笠原　その古代仏教というものは、学問をして、あれは学僧だとか、哲学者だとかいう、この評判、肩書をもって立身出世するとか、あるいは朝廷に仕えるとかいう、仏教を自分の生活に利用しているわけです。

これに対して、鎌倉仏教の開祖というのは、そういう態度はいけない、信仰だけでよろしいというのです。

いま仏書ブームですね、親鸞の書物が売れる、仏教の入門書が売れるということ、こういうことをみても仏教が正しい姿で人気があるとは言えないわけです。

たとえば、現代人が仏教に関心をもっているこの姿ですがね――。これは教養として知りたいというだけでしょう。これを知って信仰しよう、生活のなかでなんらかのプラスを得ようという、これではなしに、親鸞という話が出れば、親鸞は「悪人正機だ」とかなんだとかいって、サロンの仏教として、この会話のなかでお話をし合う、この知識を得るために仏教に関心をもつ、こんな姿勢がみられる。

さきほどの観光ブームですが、一般の人びとは、たとえば東大寺を訪れて大仏を見る、あるいはいろいろのお寺の本尊を見るといったって、これは見るんです。これは……。

――信仰ではない……。

笠原　そうです。重要文化財とか国宝とかの、レッテルの張られたお寺だけはみんな行きますが、それのないところにはだれも行きません。

仏像は美術品としてその当時つくられたものではありません。莫大な金と精魂込めて仏像や伽藍をつくる、これは信仰の対象としてつくられたものです。その信仰の対象としてつくられたものを、見せものにして生きているのが観光寺院の坊さんだと思います。

それを訪れる人たちは、博物館とか美術館に行くのと同じ気持で訪れる。こうして見ますと観光ブーム、それから仏教の哲学書ブーム、これはほんとうに仏教が正しい姿で、一般の民衆から関心を持たれている理由にはならないと思うのです。

笠原一男博士　大正5年長野県に生れる。昭和16年東大文学部国史学科卒。東京大学史料編さん所助教授を経て現在東京大学教養学部教授。
住所は東京都文京区白山1―22―130

既成教団退勢の真因

――葬式仏教はいかがでしょう。

笠原　これは現代の坊さんのおそらく九九・九%が、葬式と法要と、死者に対するお経の配達とでも申しますか、それで生きていると思うんです。これは確かに大きな役割りです。これは長い歴史のなかで、一般の民衆がそれを求めたから、坊さんは需要に応じた。と同時に、坊さんのほうからも、坊さんのすべきこと、あるいは仏教の果たすべきことは、葬式であり、法要であり、死者に対する供養だぞ――と長い間かかって教え込んだ。そこで民衆のほうは、坊さんというものは、これをやることが、昔しからの正しい役割りであるんだ、と思い込んだわけです。

しかし、鎌倉時代にいまの既成仏教の大部分が生れますが、鎌倉時代の開祖たちが、あの時代やってきたことをみたら、決してそんなことはやっていないわけです。

私は葬式はするな、死者に対する供養はするな、と言うのじゃないんです。大いにやってけっこうです。これをとり除いたら、いまの既成仏教の坊さんの生きる道も、果たす役割りもなくなります。ですが、これにプラスアルファとして、もっと坊さんがしなくちゃならない仕事があるはずです。

その仕事はいったい何かということ、これをそれぞれの宗派の開祖の中に見出す、同時に、新興宗教の中から学ばなければならないと思うのです。

――それをこれから順を追うて伺いましょう。その前に既成仏教が、あるいはその教団が退勢にあることは、衆目の一致しているところでございます。その衰えた原因でございますね。これはまあ非常に複雑でございましょうが、一言で申せばどんなことになりましょう。

笠原　それは結局ですね、仏教というものでめしが喰えるという、これがいまの仏教がこんな形になった一番の源流だと思います。

在家の仏教から、プロフェッショナルな、職業的な坊さんが誕生する。これがやっぱり仏教者の果たすべき役割りからソレていった大きな、一番の出発点だと思います。

古代仏教というのは、まさに全部プロフェッショナルです。これは職業僧侶です……。だから国家から給料をもらう。

――いわば公務員。

笠原　そうです。ところがこれを否定して在家仏教として鎌倉仏教が出てきたわけですね。

在家仏教のばあいは、すべての信者が働らきながら法を説くという形です。これが法を説いているうちに、百人の門徒ができたとする、百人の門徒から志があがってくる。こうなるともう働らかなくたって食える。そこに職業僧侶の誕生のスタートが起きます。

そうなりますと、一人でも信者の多いということ――これは宗教的な意味でな

笠原教授の主もな著書

真宗開展史
日本における農民戦争
真宗の発展と一向一揆
親鸞と東国農民
中世における真宗教団の形成
一向一揆の研究
蓮如
親鸞
真宗史概説
革命の宗教（一向一揆と創価学会）
政治と宗教（岐路に立つ創価学会）
親鸞研究ノート
転換期の宗教（真宗・天理教・創価学会）

く、経済的な意味で必要になります。そこで、新しい競争相手としての坊さんが、たくさん出ることを押える形になります。

これがいまの既成仏教の腐敗というか、その一番の原因だと思います。そのうえにいろいろの原因が、長い歴史のなかで積みかさなって、いまのようなことになってきた。

新興宗教に学べ

――戦後、道徳そのほかいろいろの価値基準が変動したり、倒錯したりしましたし、精神的なものをあまり重くみないという傾向も出たわけですね。そういうこともひとつの原因ではないでしょうか。

笠原　いや、この既成仏教が落ち目になったのは、なにも終戦後からではないので、もう江戸時代から、あるいはもっと前の戦国時代からの傾向です。

終戦後ほど、民衆がほんとうに、宗教に正しい役割りを要求した時代は少ない。にもかかわらず、葬式とか法要とか、これだけをしている。

時代の変り目と申しますのは、政治と経済と精神、この三つの世界と申しますか、これがほんとうに貧因な時代です。この貧因な時代に民衆が生きてゆくためには、最後の生きるというこの支えを宗教に求めます。たとえ既成仏教から突っ放されても、最後の生きる勇気とか支えを宗教に求めるわけです。この局面において、新興宗教が無数に誕生するわけですね。

三百年、四百年の長い歴史のなかで、既成仏教はいまのような姿勢を背負い込んでいるんです。ですから、そう簡単に、正しいと申しますか、生き生きとした姿に帰るということは並たいていのことではないと思います。

しかし、私がさっきも申しましたように、既成仏教は死んでいるのじゃないんです。眠っているんだったら、ゆり動かせば起きるはずです。これで起きなかったら宗教ではありません。

――いまちょっと新興宗教の話しが出ましたが、新興宗教というのは、戦前は弾圧されておりまして、固有の仏教だけがホンモノ扱いをうけ、政治権力から無形の庇護をうけていました。新興宗教なるものが、戦後になって活発に勃興してきましたのは、信教の自由というのが、新憲法で保証されたことも、大きな原因ではございませんか。

笠原　それは大きいですね。ともかく日本国憲法第二十条、これができたということは、宗教にとって非常にいいことだと思います。日本の宗教の発達のなかで、自分の足で堂々と生きられる時代というのは、この戦後が初めてです。

戦前、さきほどの話の、既成の仏教だけが有形無形の保護を、政治権力からうけた、確かにそうです。ですが問題は、それが正しいものだから受けたのじゃないんです。宗教として正しかったら、戦前において弾圧されます。政治権力のお太鼓持として、二号、三号になって、さようどもっともで、政府のいうことを片棒かついで、既成仏教は政府が八紘一宇といえば、すぐオーム返しに八紘一宇、自分の檀家に戦争のために死ねと説く。なんでもいうことを聞くわけですから、これは頭をなぜるわけです。

こういう態度を八十年間、いや日本の仏教の歴史のなかで、ずっととり続けてきた仏教が民衆から見放される。これは当然のことでございます。

戦前において、それが正しいから保護されたなんて、とんでもない話です。腐りきっているから、お太鼓持だから、有形無形の手当をくれるわけです。

――そこで坊さん方のうちには、新興宗教が非常に勢いを得たから、それに押されて既成教団が不振になったんだ、という人がいます。これはどうでしょう。これは「お堂が傾いたからお経が読めん」という諺のとおり、ちょっと詭弁ではないかと思いますが……。

笠原　私もその詭弁説、大賛成ですね。なにも新興宗教が出たから、既成仏教が衰えたのじゃないのです。既成仏教が死にかかったから新興宗教が出たのです。

既成仏教がやらなければならない、いかに生きるかという、民衆に対する人生のコンサルタントですね。そういうものを全然放っておいて、死んでからのちのことだけ、これはウソをいったってわかりません、馬脚が現われません。楽なことですから、死んでから後のことだけをやっている。民衆が生きてゆきたいという、この要求に全く目をつぶるわけです。

さきほど申しましたとおり新興宗教が起ったから、既成仏教が衰えたんじゃあなしに、既成仏教が死にかかったから、新興宗教が起きたんです。

このことは、日本の民衆が仏教に愛想をつかしているのじゃあないんです。なんとかして正しい仏教になってほしい、といっているんです。

既成仏教が頼りないという、その声に応じて生れてきた新興宗教、こんなものに対しても、民衆は目の色を変えて飛びつくわけです。その姿を見ますと、既成仏教も新興宗教と同じに、やっぱり現代の民衆に対して、生きる支えというものがあってもしかるべきです。そこでどうも私は、既成仏教は寝ているという評価はまだ甘すぎる、死にかかっている、こんな表現が出てきますね。

戦後の新興宗教、これは千以上ございますよ。いわば目ざまし時計です。千の目ざまし時計がいっせいに鳴り響いて、自分たちの足をひっぱり、耳をひっぱり、こんな状況になったってまだ目をさまさないわけでしょう。

たまに目をさませば、新興宗教は下らない、あんなものが出てきたから、われわれは安眠ができないなんていう、こんなバカバカしい発言をしている。これは世の中を甘く見すぎているのですよ。

崩れゆく檀家制度

――そこでそういう状況を、日本の仏教史的考察と関連して考えますと、どういうことになりますでしょうか。

奈良仏教、平安仏教、鎌倉仏教、現代仏教と移り変わっておりますが、いまの仏教というものは、ちょっと平安仏教的な色彩があるのじゃないかと思われますが、どうでございましょう。

笠原　これは伽藍仏教までゆけばまだいいのですが……、いまの寺院で伽藍仏教を起こすだけのものがあるかというと、それはないわけです。

古代仏教は、その方向は別として、これは生きています。しかしやっぱり、現代の既成仏教は正しい意味で生きていない。ここまで落ちぶれたと申しますか、日本人から見放された時代というのは、ほかにないじゃないですか。

なぜ見放されたかと申しますと、既成仏教が永い間、政治権力と妥協して、これの太鼓持をしてきた。民衆がつき放そうとすると、政治権力が離れちゃいけないといって引戻してくれたから、民衆はイヤイヤながらくっついてきたんです。

それが憲法二十条ができて、政治権力であと押しできなくなってくると、これはどうにもならなくなった。

日本の仏教史のなかで、一部の貴族のものになったり、伽藍仏教、学問仏教――こんな状況になって、鎌倉仏教の開祖たちはいっせいに攻撃したわけです。仏教というものは、伽藍仏教でも、学問仏教でも、国家仏教でもないのだ、民衆にただ単に、信仰だけによって生きる勇気を与えるということ、この線をいっせ

いに出してきたわけです。

それがまた間もなく、開祖たちは信者の上にアグラをかいて、その地位を守るために政治権力のお太鼓持に変ってくる、これが戦国時代以来五百年くらい続いているわけです。

――先生のいわれる結論は、仏教の本道は生死の解脱にあるんだ――と主張されているわけですが、このことは少しあとで承わることにして、その前に、現代の社会と既成の仏教団の現状という点を伺います。

いまのような仏教の退勢の原因のうちには、農山村、漁村の共同体というものが崩れて、教団の末端の寺との結びつきが非常に薄くなった、檀家制度が根本的にゆらいできた、こういうことについてはどうお考えでございましょうか。

笠原 檀家制度が維持できたのは、政治の力で押えていたからです。檀家制度は江戸時代にできています。江戸時代の坊さんというのは、徳川幕府の政策を全面的に支持しているわけです。だからそのリベートとして檀家を縛りつける、こんな政策を徳川幕府がとっていたわけです。檀家が逃げたら幕府とか藩とかが連れ戻してくれるんです。

江戸時代の坊さんというのは、冠婚葬祭から旅行の証明書、かつての村役場の役割りもするし、さらに特高警察でもある、怖いから檀家がくっついている。

檀家と信者は全く違います。先祖以来の悪縁で泣くでも檀那寺に奉仕する、しかしこれは信心ではないから、いったんその縁が切れたら、糸の切れたタコみたいに、決して帰ってはきません。

――仏教退勢の大きな原因は、坊さんがともかくお寺で食ってゆけるということ、これが無気力で怠惰な仏教を作りだしたのだというお話しでしたが、東西真宗の住職は七〇%が兼業状態でないと食っていけない。

笠原 兼業けっこうです。問題は、兼業は自分で紡いで、自分で耕して、自分で働らいて食って、なおかつ自分がその宗教に、弥陀の本願によって救われているというその喜びを、一人でも多くの人に分け与えるという布教です。自分で食べながら自分で布教するという、この姿勢が親鸞の主張した姿勢だと私は思います。その意味で、形式からみると兼業たいへんけっこうです。問題はその精神です。

いままで檀家の上にあぐらをかいていたが、これではもう飯が食いきれない。檀家は何もくれない、ただ葬式だけだったら、なにも檀那寺を維持していく必要はないじゃないか、そこでつぎつぎに離れていく。こうなると坊さんは、墓と葬式と法要の上にあぐらをかききれなくなってくる。

また檀家のほうも、さっきの共同体的な制約から離れて都会で生活する。こんな状況が出てくると、坊さんだって食っていかなくちゃならないから、結局アルバイトをするわけです。

布教するためには生きなくてはならない、生きるためにはアルバイトが必要、これなら話はわかるのです。

問題はアルバイトをしてるうちに、アルバイトのほうで飯が食えるんだ、食うためにアルバイトをする、坊さんとしてやらねばならぬことがお留守になる。これは本末転倒でございますから、兼業はけっこう、形式、形の上ではけっこうだけれども、精神がまるっきり逆だということですね。

坊さんに信心がない

――そうしますと、いままでいろいろお伺いしたことを纏めてみますと、既成教団の現状というものは、信者を組織したり、指導したりする、お寺さんの能力が欠けておるんじゃないか、つまりお寺さんの側、宗教指導者の側に問題点がある――こういうことになりますでしょうか。

笠原 そういえると思います。能力が欠けているなんていう、そんななまやさしいもんではない。もっと根本的に、信心が欠けている。

――坊さんそのものに信心がない。

笠原 ともかく、信心なくして人に法を説くなんてこと、これは親鸞もきわめてきびしく戒めています。信心決定してない人は、自分のために、自分の信心決定のために念仏しなさい。信心決定のうえ初めて自信教人身、法のために布教しなさい、そう言っています。

いまの坊さん自体、念仏なら念仏を心から信じ、それぞれの教えを心から信じているか、非常に疑問ですね。自分で信仰の体得なくして法を説くなど、少しでも良心があったら恥ずかしくっていえないですね。

――そうですね。全くです。

笠原 そういう根本的なものが欠けているうえに、私に言わせると、今の坊さんは不勉強です。その不勉強という点ですが、坊さんたちが、たまに葬式、法要をキッカケに説教したって、これは江戸時代からの焼直しで、新しい時代に対応し、新らしい民衆の要求に応える勉強というものをしている人が少ないようにみえるわけですね。

そこにいまあなたがおっしゃった能力の点でも欠けています。信心が欠け、能力が欠け、しかも熱意がないときたら、これはどうにもならないんじゃないですか。これでどうにかなるとしたら、坊さんほど楽な商売はないですね。

信者を殖やすということは、親鸞も言っていますが、むづかしいうちにもむづかしいものです。これは人の世界観を変えることなんです。ゴム紐を売るんだったりしてやこれは心を売るわけでしょう。売るといっても悪ければ、心を新しく変えさせるわけですね。これは……。

――さてそこで、それではこの既成仏教団は、どうすべきか、どうしたらよいかという問題になるのでございますが、既成教団は布教活動が不足だということだけでなく、どうもお経の講釈が多く、それが難解でなんのことかさっぱりわからん。つまり非常に難しい仏教になってしまった。これはもう仏教ではなくて、宗教ではなくて、哲学になってしまったんだという説もありますが――。

宗祖に還れ

笠原 これは、たとえば鎌倉仏教でいいますと、開祖が主張した精神を忘れ去っているということです。

ですから、既成仏教の坊さんが、これから何をやるべきか――ということを考える場合、まず宗祖は何をしたか、これを宗祖自体にじかにぶつかって教えを請わねばならないと思うんです。

明治時代の坊さんは何をしたか、江戸時代はどうであったか、そんなことを辿ってゆく必要はないんです。じかにズバリ、親鸞は何をしたか、法然は何をしたか、そして日蓮は何をしたか、あるいは道元は何をしたか、です。

宗祖がやったこと、それによってこれだけの大きなものができ上ったわけですから、そこにこれからの坊さんの進むべき、ひとつの根本精神というものを見出すべきです。

しかし、鎌倉仏教の開祖を、あのままの姿で現代に引きおろしてきたって、これはいけません。宗祖に還るということはけっこうです。だが宗祖そのものに還るんじゃなしに、宗祖のほうから現代社会に降りてきてもらう。

降りてきてもらうといっても、鎌倉時代に通用した宗祖が、そのまま現代に通用するんじゃなく、鎌倉時代の宗祖の、どの部分が現代社会にマッチするか、これを選んで降りてもらうんです。

九十才の生涯の親鸞が、そっくり現代

に通用するんじゃなしに、親鸞のどの部分が、現代社会の民衆が求めているものか――このことをまず坊さん自体が見なくてはならん。

その前に坊さんたちは、現代社会の日本の民衆は、仏教に何を求めているか、このことを自分で感じとって、民衆の要求を親鸞に突きつけ、道元に、日蓮に突きつけ、開祖からそれを学んで、開祖たちは君たちの苦しみを、こういう形で解決してくれるぞ、そうやってこれを民衆に与えなくてはならないわけです。

そのためにも坊さんは、現代社会というものを極めて厳しい姿で勉強せねばならんし、同時に宗祖の人間像と哲学を勉強せねばならない。

宗祖と現代人の仲だちになるのが坊さんです、坊さんが仲だちにならずして、誰れがいったいつぎつぎに発展してゆく時代のなかで、それぞれの宗祖を一緒につれ、それを生かしていくかという問題です。

――信心があり熱意のある坊さんは、それをやるでしょう。だが、二軍的な坊さんの役割りとしては何がありましょうか。

笠原　さきほど根本的な問題として、坊さんに信仰が失われているといいましたけれども、オレたちはとても信仰なんていうものは、という坊さんがあれば、それでもいいと思います。

信仰を持たない坊さんが、どんな役割りが果たせるかというと、一般の人たちは、ほんとうに宗教を求めているんです。これは新興宗教を見ればわかります。いいとか悪いとかは別として、ともかく目の色を変えて信仰を求めています。それを生活の中に生かしているわけです。そして新興宗教を生かすことによって不幸が起こる場合が多いのです。

新興宗教というものは、金儲けのための教団がかなり多いのでございます。人間の幸福のために宗教があるのでなく、宗教の発展のために人間があるという、こんな考え方をしている新興宗教……全部じゃありませんが、かなりあると思うんです。こんな新興宗教にすら、目の色を変えて、たくさんの民衆がついているわけでしょう。

そこで、なぜ坊さんたちは、本質的な宗教というものを説かないか、坊さんたちは信仰を持っていないから説かない、さらに勉強しないから説かない、ということもできますが、信仰を持たない、勉強していない、それでもまだやれることがあると思うんです。

それは何かと申しますと、一般の人たちが宗教に対して正しいものを求めている、これのお世話役をすればいいと思うんです。

たとえば宗教の布教をしたいけれど場所がなかったら、私のお寺を使いなさい、何かよい読むものはないか、それならこれをお読みなさい。

こんなふうに、精神の世界、宗教の世界の公僕としての役割りをしたら、現代の坊さんのやることが、もっと生き生きとしてきて、もっと前向きの役割りが果たせると私は思うんです。

（次号につづく）。

全日本仏教徒大会

大会実行委員総会

行事の構想を纏める

ことしの秋、岐阜市でひらかれる第十五回全日本仏教徒大会の基本計画は、五月六日午後一時から岐阜市民センターで開らかれる同大会実行委員総会でだいたいの構想が纏まる。この総会は県仏関係者ばかりでなく県下の檀信徒の主もな協力者も含めて、実行委員総数約二千人にもおよぶ大がかりな会合で、豊原理事長はじめ全仏の所掌役職員なども出席する。実行委員全員に全仏会長の委嘱状が交付されてから議事に入り、お待受け各行事原案について相談することになっている。当番の岐阜県仏がこれまでに練りに練った当初計画としては、

期日　十月八、九両日

会場　(A)県民体育館（本会場に充て一八、〇〇〇人動員収容。）
(B)聖徳女子短大体育館（各部会に充てる）

協賛行事　仏婦大会は九月十日高山市の飛騨体育館で約四千人を集めて、また仏青大会は、大垣市大垣スポーツ会館で約三千人が集ってそれぞれひらく。

観光行事　仏教徒大会参加者の宿泊料は、税別一泊二食つき二、五〇〇円。鵜飼い見物費用は八六五円。

周遊Aコース（五〇〇円）は市内見学、金華山ドライブ、公園、岐阜城など。

Bコース（四、五〇〇円）下呂温泉一泊、美濃太田、日本ライン下り、犬山城見学名古屋市解散。

Cコース（一、五〇〇円）美濃太田を経て日本ライン下り、犬山城明治村など見学、岐阜市で解散。

仏婦大会の観光行事は未定であるが、乗鞍登山、平湯温泉泊りのコースは参加費約三、五〇〇円。

高山市内見学（民芸館、白川郷民家、城山公園、国分寺など）のコースは参加費約四〇〇円。

「テーマ」と「スローガン」

岐阜大会の性格を決定ずける「大会テーマ」「大会スローガン」それに運動目標などは、もっともたいせつなものであるから、全仏本部と岐阜県仏で慎重に案を練っていてまだ本決りになっていない。岐阜地元当局としては「新時代に対応する仏教の展開」を大会テーマにとりあげ、またスローガンとしては「仏教の大衆化、仏教をすべての人びとの手に」ということを強調したいとしている。つぎに運動目標としては、

イ、みんなで幸せの鐘を聞こう、鳴らそう。

ロ、ありがとう、こんにちは、さようなら――あいさつをかわし合おう。

ハ、わが家に聖なる喜びの日を待とう。

ニ、みほとけの書に親しみ、心の友に贈ろう。

ホ、私たちの郷土を、みほとけのおいでになる、住みよい所にしよう。

などを織り込み、わかり易く実行し易いもので、大衆にアピールしたいと願っている。

全　仏
第3種郵便物認可
昭和42年5月1日

大会の日を待つ両会場

（上）大会の主会場になる岐阜県体育館
（下）部会の会場にあてられる岐阜南短大

彙報

☆ **全仏理事会**

財団法人全日本仏教会の理事会は五月九日午後一時から築地本願寺で開らかれ、昭和四十一年度決算承認をはじめ重要議案を協議。理事会にさきだち四月二十四日会計監査が行われた。

☆ **万国博の打合せ**

全仏はさる四月十二日日本万国博覧会協会東京事務所倉田次長、洞口出展係長を招き、黒田事務総長、各局部長が出席し、万博の準備状況、出展に要する費用など、また全仏がどんな方法で、万博に協賛したらよいかなどについて約二時間懇談した。

☆ **神父さんから申入れ**

さる四月七日、正則学院名誉校長今岡信一良、全仏理事中山理々両氏に案内されて、アメリカ各宗教平和委員会の、ハースチエル・ハルバート、ホーマーAジャック両神父が全仏事務局を訪れ、世界約二十五カ国の宗教者を招き、世界平和の問題を討議したいが、その前提として、日米両国の宗教者がまず話し合いたいと申入れた。

☆ **仏政同の定期大会**

仏教政治同盟第三回定期大会は四月二十四日午後二時から芝増上寺会館で開かれ予決算の承認、規約一部改正、本年度の運動方針案を決め、役員改選にうつり、一年あまりを献身的に努力された阿部竜伝統理は後進に道をひらいて辞任。新統理は追って選任すること、副統理に杉本良智氏、貝山宣泰の両氏（ほか一人は未定）の三人を選任し宣言文を採択して午後五時修了した。

☆ **千葉県仏の役員総会**

ちかごろとみに活発な動を見せている千葉県仏教会（会長松田照応師）では、五月二日午後一時から成田山新勝寺境内にある信徒会館で本年度の役員総会をひらき会務を協議。

☆ **埼玉県仏役員総会**

埼玉県仏教会（会長倉持秀峰師）では、昭和四十二年度役員総会を浦和市高砂の県仏教会館で四月二十五日午前十時からひらいた。倉持会長ほか各役員、市郡支部長、教化委員など約三十数人が出席、本年度予算案、事業計画その他重要議案を決め、仏教運動を活発に進めることを申合せた。

☆ **哀悼録**

前全仏主事古宇田亮文師の母堂はさる四月十一日交通事故で、また鎌田良昭師（全仏主事）の父君は病臥中さる四月十五日、いずれも亡くなった。鎌田師厳父は享年六十六。

表紙のお寺

東京新宿区南元町、国電中央線信濃町駅のすぐそばの永固山一行院千日寺（浄土宗）。この地は古河城主（七万二千石）永井右近太夫直勝の下屋敷のあったところ、慶長年間直勝の発願によってこの寺は草創され、三年目ごとに千日回向を修したのが寺号の由来。高速道路四号線のため、境内と墓地の一部を収用され、三十九年十二月改築の堂宇再建。

本堂を千日谷会堂、納骨堂を千日谷舎利塔と呼びっ外観内容ともに超モダーン。本堂はホテルと劇場をチャンポンにしたようだし、納骨堂はエレベーター仕掛けの貸金庫式。

住職は三十三世浄誉八百谷孝保師（大正大学教授）。別に千日谷音楽センターとして音楽学校を併設している。

あちらこちらの仏教会

活発な静岡県仏

静岡県下の寺院数は約二、六〇〇で京都府のそれに近く、東京都の寺院数とほぼ同じという全国有数の仏教県であるが、さきに開らかれた全日本仏教徒の大会を機に、檀信徒組織化や仏婦運動の強化が順調に進み、地域の仏教振興に大きな成果を収めている。これを裏付ける県仏の予算も二〇〇万円近く計上され、県仏事業のうちたいせつな広報活動に意欲的なところを見せ、県仏会報は年間数回発行されている。

なお同県仏本年度の活動方針はつぎのとおり。

㈠ 全一仏教、和合の精神をもって仏教徒本来の使命を達成すべく努力する。

㈡ 県仏教会運営の円滑化をはかり、経済援助を懇請する。

㈢ 布教活動の活発化をはかり会員相互、教化資料交換のために県仏会報紙面を大巾に提供する。

㈣ 県仏婦、県青少協等の団体に協力補助をする。

昭和42年5月1日

全仏
第3種郵便物認可

ベトナムに平和を——
全仏、これまでの動き

外電によれば、ベトナム戦のウエサカ休戦提唱は米国にも大きな反響を与え、米軍は北ベトナムの同意があれば、ウエサカ休戦に応ずる空気とのことである。

全日本仏教会はかねてベトナム全面平和の招来について、仏教徒の立場からいささか努力してきたのであるが、この一時的休戦が永久平和のいとぐちになるよう、その大きな目的のために、釈尊降誕の聖日のウエサカ祭のたとえ一日でもぜひとも休戦が実現するよう、全日本の仏教徒の総意を代表する全仏は、国の内外に強く働らきかける方針である。

わわが国のあらゆる仏教徒が念願するベトナム平和実現のために、全仏はこれまでなにをしたか。その主な動きを追って、ウエサカ休戦実現運動のよすがにしたい。

ベトナム救援決起大会

昨年四月八日、日比谷音楽堂で大会をひらき、参加者有志は銀座街頭でベトナム救援のための募金とウエサカ休戦のための署名収集をしたほか、全国の仏教系学校に呼びかけ、署名数万を集めた。

内外政府に要請

全国から集った署名は、阿部竜仏全仏常務理事ほかが、宇都宮徳馬代議士の紹介で椎名外相に手交して休戦実現の申入れをした。外相は協力を約束した。その翌日、アメリカ大使館を訪問して休戦を要請、さらにベトナム大使ともこのことについて懇談し、数万人におよぶこの署名簿を、ベトナム大使を通じて同国政府に送った。残念ながら、このときは休戦実現にいたらなかった。

現地仏教会との接触

本年二月、福島県下から集った慰問品を携え、福島県仏会長吉岡棟一師がベトナムに向ったので、ベトナム統一仏教会にあてた全仏会長のメッセージを托し、ウエサカ休戦実現のための活動を要請した。吉岡師は、タムチャウ師、チクアン師ほかベトナム仏教界の指導者と会い、一時休戦運動展開の賛成をとりつけた。

地方選結果（東仏関係）

東京都知事選で東京都仏教連合会（会長来馬道断師）は、支持候補のため強力に応援したが惜しくも破れた。しかし区議会議員選挙には十四人の推せん候補のため各寺が応援の結果十一人が当選の栄冠を得た。

大阪府知事には左藤義詮氏（大谷派出身）が、圧倒的な強みをもって再選された。公明党は東京の区議選で予想外に振わなかった。区議会議員当選者つぎのとおり

千代田区	自民	川俣 光勝	（真言宗智山派）
台東区	自民	吉水 現祐	（浄土宗）
杉並区	無所属	関 碓元	（曹洞宗）
中野区	自民	金子 光瑩	（日蓮宗）
足立区	自民	神谷 豊信	（新義真言宗）
板橋区	無所属	平井 宥児	（真言宗豊山派）
墨田区	自民	磯山 頼山	（真言宗智山派）
葛飾区	自民	白川 栄澄	（日蓮宗）
同	自民	釈 昭純	（真言宗豊山派）
同	自民	佐野 広中	（天台宗）
江東区	自民	小林 賢晋	（真言宗智山派）

日光でブロック会議

全日本仏教会の本年度最初の地方別会議は五月十二、三の両日栃木県日光市の輪王寺および奥日光南間ホテルを会場としてひらかれる。出席を予定されている都県仏は関東甲信越地区で東京、神奈川、埼玉、千葉、静岡、山梨、茨城、群馬、長野、新潟、栃木の十一都県からそれぞれの代表者が参集し、地域仏教会の振興策について協議するほか全仏からは昭和四十二年度運動方針について協力をもとめることになっている。

第一日は午後一時現地集合輪王寺で法要厳修、引きつづき宿舎の南間ホテルで翌日午前十一時まで協議会がもたれ、各県仏相互の親睦と全一仏教運動を強力に進めるための相談がある。

全仏ではこれにひき続き、順次各地方別会議を開らくことになっている。

インキ赤

題号を変え、内容も少しずつ刷新してゆき、みなさまのご参考になるような記事を——と心がけております。その手はじめとして東大教授笠原博士を煩し「お寺さんの理想像」の対談を上下にわけて連載します。これからも在家有識の士から、仏教界に対する卒直なご意見をお聞かせ願うつもりです。編集についてのみなさまのご叱正をいただければありがたいと思います。（やなぎ）

感謝の礼拝
平和な家庭
株式会社
小坂仏具店
大谷ご本廟、室内改装
ご荘厳設計施工の栄に
浴しました。
本店 京都市烏丸通東本願寺前
電話 37—2195（代表）・37—1256
東京店 台東区西浅草1丁目6番5号
電話 844—3715・6656・841—8328

おしゃかさま
——→仏教掛図シリーズ誕生！ 企画・仏教教材研究委員会
仏教系の幼稚園・保育所の教材としては勿論、仏教寺院の年中行事・日曜学校こども会などでもご活用下さい。
1. はなまつり—既刊—
2. じょうどう
3. ねはん
A全判/13枚/多色刷/2,500円
わたしたち団体は推薦します——→ 全日本仏教会
日本仏教保育協会
全日本青少年教化協議会
ひかりのくに昭和出版株式会社
大阪 南区上本町3—12 大阪 (768) 1151～7
東京 新宿区神楽坂1—6 東京 (260) 8184～7